

アパラチアン・トレイルとアメリカ文学

— 牧歌としての場所の感覚 —

星野 勝利

I went to the woods because I wished to live deliberately, to front only the essential facts of life, and see if I could not learn what it had to teach, and not, when I came to die, discover that I had not lived.

—Henry David Thoreau, *Walden*, 1856

I believe I have finally found my niche, and it's here in the woods. I thrive here. I relax here. I feel so right here.

—David Brill, *As Far As the Eye Can See*, 2001

1 はじめに

大学の概論レベルの授業、あるいは高校の総合的学習の時間の授業のなかで、たとえばアメリカ合衆国について学ぶとする。学び方にはさまざまな方法が考えられる。国家の歴史、政治制度、社会や経済の仕組みを調べる方法も有力である。歴代の大統領や州や都市の名前、人口や人種構成、文化や芸術、スポーツや芸能、これらを探る方法も考えられる。手もとの地図をひろげ、合衆国の地勢図から接近する方法も考えられる。

合衆国の地勢図を眺めて気づくのは、ロッキー山脈の巨大さとミシシッピー川の長さである。地図上での両者の存在感の大きさは、ほとんど甲乙つけがたい。両者以外の山や川が目に入らないわけではない。たとえば、川。ロッキーの峡谷を縫って太平洋に注ぐスネーク川、大峡谷を縫ってカリフォルニア湾に注ぐコロラド川、メキシコ湾に注ぐリオ・グランデ、東部を横断するオハイオ川、大都会ニューヨークを横に見て、大西洋に静かに流れ込むハドソン川、などなど。

川だけではない。ロッキーに続く山なみも次第にその輪郭をあらわす。西海岸をはるかに望んで走るカスケード山脈、南に連なるシエラネバダ山脈。目を東に

転じて、大草原を越え、ミシシッピーを越えると、広く合衆国東部を縦断する大きな山塊が目に入る。ロッキーの山なみほどその高さを誇示することはないものの、アメリカ東部の広い領域にわたり、確実にその地歩を固めている観のあるひとつの山塊、アパラチア山脈である。

アメリカ合衆国について学ぶ際、いまかりに、ロッキーでもミシシッピーでもなく、この山塊に関心を抱いた学生がいたとする。しかもその学生が、アメリカ合衆国の歴史や文化、自然や環境の問題にも、強い関心を抱いていたとする。このような場合、合衆国東部のひとつの山脈は何を提供することが可能か。

2 アパラチアン・トレイル

中米やペルーでの勤務を経て1539年5月フロリダ半島に上陸したスペイン人探検家フェルナンド・デ・ソト (Hernando de Soto, 1500?-1542) は、以後約3年間、未開の地 (テラ・インコグニタ) の探索の旅に従事する。大陸東部を中心に、金銀獲得を視野に入れた旅である。山岳地帯を越え、内陸深く進んだ一行は、目の前にミシシッピーの大河を発見する。勇躍川を越えたものの、目指す財宝に出会うことのなかった一行は、失望のうちに引き返す。その途上、デ・ソトは、ミシシッピー川の岸辺で息絶える。息を引き取ったデ・ソトの死体は、そのままミシシッピーの川底に沈められたという。インディアンによる死体冒とくを恐れたからである。残された部下たちは、メキシコ湾に向かい、ミシシッピーを下る。

フロリダ半島から新大陸内陸部に向かうデ・ソトの旅は、原住民であるインディアン部族との絶えざる闘いの旅であった。いまではその面影がほとんど窺えないものの、フロリダから内陸に向かうこの地は、かつては多くのインディアン部族の住む世界であった。いまでは「アパラチア」と呼ばれるこの地域は、フロリダ半島北西部に住んでいたチョクトー・インディアンのことば「アパラッチー (向こうがわの人々)」を、デ・ソトが用いたことに由来する。このデ・ソトが、ミシシッピー河畔で命を落としたのは、清教徒一行 (ピルグリム・ファーザーズ) が大陸北部プリマスに上陸する 1620 年の 80 年も前のことであった (Highsmith, 7)。

デ・ソトの時代から約 300 年、1838 年から 1839 年にかけての冬、アパラチアの山々の中に居住していたインディアンの一部族が、ミシシッピーを越え、はるか西部の地、オクラホマに設置されたインディアン保留地に移住する。この移住は、インディアンたちの望んだものではなかった。1830 年代に居住地内で金鉱が発見されたことにより、それまでことあるごとに白人植民者たちと衝突してきた

インディアンが、土地を買収され、結果として、白人の用意した居留地への移動を強制された。厳冬期の移動は過酷をきわめ、旅の途上で約四分の一が命を落とす悲劇を招来する。悲劇の主演となったのは、アパラチア山脈南部地帯に居住したインディアン、チェロキー族。チェロキー族がオクラホマに向かって歩いた道は、やがて「涙の道」(Trail of Tears)と呼ばれる。

アメリカ大陸東部に横たわるアパラチア山脈 (The Appalachian Mountains) は、全長約 2600 キロ、幅約 100 キロにおよぶ長大かつ広大な山脈である。北はカナダのガスペ半島から、南は合衆国南部ジョージア州に至るこの山塊は、それ程高い山々の連なりではない。せいぜい標高数百メートル、高くても約 2000 メートル止まりの山塊である。ただし、北から南に向かってグリーン山脈、アレゲニー山脈、ブルーリッジ山脈、グレート・スモキー山脈と、多くの峰々を従えたこの山脈は、近くに点在する町や村、そこを縫うように流れる数多くの川を抱え、絵のように美しい風光明媚の地である。同時に、森林資源や地下資源に恵まれたゆたかな自然の世界である。しかしこの地は、デ・ソトやチェロキーの悲劇にみられるように、北米大陸開拓の歴史、合衆国建国の歴史と、深く結びついた地域でもある。

19 世紀前半のチェロキー族の悲劇から約 80 年後、第一次世界大戦をくぐり抜けた頃のアメ리카で、一人の山好きの男が、アメリカ東部アパラチア山脈の一つ、バーモント州に峰を連ねるグリーン・マウンテンズの山に入る。山の中ではるか遠くを眺めやったその男は、彼方に広がる連山を前にして、一つの思いを抱く。目の前に広がる山々を、北はカナダから南はジョージアまで、一本の道で結ぶことはできないか、という思いである。1921 年、この山男は、さる雑誌にこの思いを寄せる。これを契機として、思いが現実のものとなる。1937 年、北のメイン州から南のジョージア州まで、アパラチア山脈を貫く一本の道 (トレイル) がつながる。メイン州中部のマウント・カタールディンからジョージア州北部のマウント・オグレスープにいたるハイキングコース、アパラチアン・トレイル (The Appalachian Trail) の完成である。¹⁾

アメリカ合衆国の「トレイル」といえば、一般にオレゴン・トレイルが知られる。ミズーリ州インデペンデンスから、大草原地帯を越え、ロッキー山脈を越え、オレゴン地方に向かい、太平洋に注ぐコロンビア川の河口アストリアに至るトレイルである。3200 キロにおよぶこのトレイルは、西部開拓史上もっとも有名な移住路として知られる。西部に至る交通路として 1820 年代から知られていたこのトレイルは、「涙の道」の悲劇が起きた 1840 年代頃から、とみに利用されるように

なった。1843年に敢行された1000人を越える大集団の移住は、幌馬車隊の組み方、野営の方法、食料や飼料の補給等、その後の多くの移住者たちに範を示すものとなった。しかしこのトレイルも、南北戦争(1861-65)の後には、建設が進んだ大陸横断鉄道にその役割を譲ることになる。

「トレイル」という点では共通するものの、アパラチアン・トレイルとオレゴン・トレイルあるいは「涙の道」の間には、役割や性格において大きな差がある。19世紀に形成されたオレゴン・トレイルや「涙の道」が、生きるための道、すなわち生活や生命の維持と直結した道であったのに対し、20世紀に形成されたアパラチアン・トレイルには、このような背景は希薄である。あくまでも、ハイキングのため、トレッキングのため、すなわち山歩きのための道である。

このような道が、20世紀前半アメリカ合衆国において、なぜ形成されたのか。

3 ジャズ・エイジの改革者

1921年に発行された小さな学術雑誌『アメリカ設計者協会誌』(*Journal of the American Institute of Architects*)の10月号に、次のような書き出しで始まる一つの提言が掲載される。

Something has been going on in the country during the past few strenuous years which, in the din of war and general upheaval, has been somewhat lost from the public mind. It is the slow, quiet development of a special type of community—the recreation camp. (Emblidge, 47)

書き出しの文言から、時代背景がよく見える。1921年という年は、第一次世界大戦が終結してまだ間もない頃である。このころ合衆国では「戦争」による「喧噪と変動」がまだ至る所に見られた。じっさいアメリカは、この大戦に400万あまりの大軍を動員し、そのうち200万を越える兵をヨーロッパ戦線に送り出した。結果として、国家アメリカの姿が大きく変わる。大々的軍需生産体制は、アメリカを債務国から債権国へと転換し、経済的、政治的に、大国への道が約束される。このような社会状況の中、人々が聞き慣れていない一つの「コミュニティ」が、ゆっくりと成長していた。「レクリエーション・キャンプ」である。

戦時下の喧噪の中で失われ、戦後静かに成長しつつある「レクリエーション・キャンプ」は、この著者によると、特定の場に生み出されることが望ましい。その「場」とは、いまだ人の手の入らないような「ワイルド・ランド」である。「ワ

イルド・ランド」は、大陸西部シエラネバダ山脈、カスケード山脈、ロッキー山脈、そして東部アパラチア山脈に抱かれた場に主として認められる。ただし、「レクリエーション・キャンプ」のためには、この「場」は、アメリカ東部にこそ見い出されなければならない。なぜならば、「キャンプ」を真に必要なとする人々はアメリカ東部に住む人々だからである。そのためにふさわしい「場」となるもの、それが、長大かつ広大な山塊、アパラチア山脈である。その峰々を一本のハイキングコースで結ぶこと、これが提言である。コースの名前は、「アパラチアン・トレイル」である。

提言「アパラチアン・トレイル—地域開発計画」(An Appalachian Trail: A Project in Regional Planning) はベントン・マッケイ (Benton MacKaye, 1879-1975) によってなされる。マッケイ 42 歳の時である。1879 年、コネチカット州スタムフォードに生まれたマッケイは、早くから自然に親しむ。9 歳の時、ボストン近郊シャーリィに転居したマッケイは、友だちと秘密結社「放浪少年クラブ」(The Rambling Boys' Club) を結成し、近くの森をさまよいて歩く。この結社には、つぎのようなモットーがあったという。

To give to the members an education of the lay of the land in which they live, also of other lands, taking in Geography, Geology, Zoology, and Botany of them. (Emblidge, 69)

地理学、地質学、動物学、植物学を取り込みつつ、住んでいる土地 (ランド) のかたちを学び合うこと—10 歳前後のこどもが掲げるモットーとしては、レヴェルの高さが際だつ。高尚でさえある。こどもとして掲げたこの姿勢は、その後マッケイの人生を貫徹する。ハーバードの学生としてニューハンプシャー州のホワイト・マウンテンやバーモント州のグリーン・マウンテンズの山々を歩き回ったマッケイは、森林学で学位を取り、ワシントンの森林局で働き、国立公園指定の準備として、ホワイト・マウンテンの森の管理の仕事に従事する。その間に暖めた思いが、アパラチアン・トレイルの提言へと連なる。こどもの時の身近な「土地」への思いが、国レヴェルの「土地」への思いへと拡大したと見ることもできる。

アパラチアン・トレイルは、マッケイひとりの力でできあがったわけではない。共鳴した多くの協力者たちの共同作業でできあがったものである。連山を一本の道でつなぐという発想そのものも、マッケイの占有特許であったわけではない。

登山活動は19世紀後半頃から、主としてニューイングランド地方の知識人の中で楽しまれてきた。1875年創設の登山クラブ、アパラチアン・マウンテン・クラブは、ニューハンプシャー州の山々に数多くのトレイルを開拓していた。ダートマス・アウトイング・クラブも、同じくニューハンプシャー州に登山道づくりをしていた。バーモント州やニューヨーク州でも同じ活動は行われていた。ペンシルヴァニア州のブルー・マウンテン・クラブも、ブルー・マウンテンに個別にトレイルを拓きつつあった (Emblidge, 181)。これら個別のトレイルを一本のトレイルに結ぶこと、この点にマッケイの独自性があった。

マッケイによると、アパラチアン・トレイル建設には三つの目的がある。(1)レクリエーションの機会の提供、(2)健康とその回復の可能性の提供、そして(3)雇用機会の提供、である (Emblidge, 51)。雇用機会の提供は、一見、提言となじまない。しかし、トレイルを結ぶことにより、トレイル近隣の町や村や町にも利用者の宿や食料基地など、波及的雇用機会が生じることが想定される。

未開地開拓の過程では、コミュニティの形成が避けがたい。生命の維持のため、生活のため、開拓者が共同体を営むことは、有益であり、自然である。合衆国建国の過程でも、このようなコミュニティが数多く形成された。1607年にバージニアに建設されたジェームズタウンや、1620年に建設されたプリマスはその典型といえる。トランセンデンタリズムの信奉者たちが1841年にボストン郊外ウエスト・ロクスベリーに建設した理想主義農場ブルック・ファームも、その一つである。クエーカー教徒の一派シェイカーが建造したシェイカー・ヴィレッジも、旧来の生活様式を固執するプロテスタント・アーミッシュ派の人々の村も、やはりこの流れの上にある。

マッケイの「レクリエーション・キャンプ」としてのアパラチアン・トレイルは、このようなアメリカ的コミュニティを想起させる。ただし、マッケイが描く構成者は、これらのコミュニティの構成者と微妙に異なる。アメリカ的コミュニティを構成したのは、ピューリタンであり、トランセンデンタリストであり、シェイカーであり、アーミッシュであった。いずれもヨーロッパ・キリスト教文明の洗礼を受けた人たちである。しかし、マッケイによると、コミュニティとしてのアパラチアン・トレイルを構成するのは、ローマ帝国の辺境に住んでいたような「野蛮人(Barbarian)」である。1927年のニューイングランド・トレイル会議におけるマッケイの講演「野外文化、一本道の哲学」("Outdoor Culture--The Philosophy of Through Trails")によると、アパラチアン・トレイルの建設は、「野蛮人の侵略」に等しいものであり、これは「大都市の侵略」に対する「反撃」

にはかならない。しかもこの「野蛮人」は、「ピューリタン」ではない。アメリカ文化の根源にピューリタニズムとフロンティアを見る見方があるが (Turner, 45)、マッケイによれば、この「野蛮人」は、「魂」という一種のダムに水を貯える「ピューリタン」とは異なり、水を吐き出す「排出口(sluceway)」の必要性を十分にわきまえた「野蛮人」である。

What manner of man may be the coming American “Barbarian” ? A Purifier? Yes, perhaps, but not a Puritan. The Barbarian which I have in mind is a rough and ready engineer. He understands water pressure and he understands human pressure. He knows each demands its outlet....As with water pressure so with soul pressure: its “hydraulics” are the same. The Puritan would build a dam; but the Barbarian would build a sluiceway. (Emblidge, 285-6)

コミュニティの建設は、本質的にユートピア志向である。建設の際に想定される世界は、理想的なものとしての共同体である。マッケイの目指すアパラチアン・トレイルも、一個のユートピアである。さながらローマ帝国を想起させる 20 世紀前半、第一次世界大戦直後のアメリカ、激しく都市化するその社会の中で、辺境の民バルバロイが反撃を試みる場、それがマッケイの描くユートピア、アパラチアン・トレイルである。

アメリカ東部を縦断する山脈にマッケイはユートピアを見る。ピューリタンが貯えたダムの水をあえて放出する場としてのユートピアである。一本の道は、そのための「排出口」にはかならない。このようなマッケイは、傍目には、「歩くアナクロニズム」であり「ジャズ・エイジに迷い込んだ 19 世紀の改革者」であった (Emblidge, 69)。なるほど当時にあつては、メイン州からジョージア州までの山々を一本の道でつなぐこと自体、時代錯誤の夢物語であった。しかしこの提案はただちに協力者を呼び込み、1937 年、ついに一本の道が完成する。その後一時的に切れ目ができることはあつた。しかし、第二次世界大戦後の 1951 年、再び一本の道がつながり、1957 年、現在のアパラチアン・トレイルが完成する。この経緯を見ると、アパラチアン・トレイルにかけたジャズ・エイジの「改革者」の夢は、かならずしも時代錯誤のものではなかつた。

4 コンコードの森

1841年、ボストン郊外のブルック・ファームで、一つの共同体が誕生する。フランスの空想的社会主義者フーリエの思想を信奉するジョージ・リプリーによる実験農場である。6年後の1847年、農場は早くも破綻するが、農場が営まれたこの時期は、アメリカ南部で「涙の道」の悲劇が生まれ、北西部で移住者たちが「オレゴン・トレイル」を移動していた時期とほぼ重なる。このころ、ボストン近郊コンコードのウォールデン湖のほとりで、自給自足の実験的生活を試みた若者がいた。ソロー (Henry David Thoreau, 1817-62) である。

湖のほとりの森の中に小屋を建てたソローは、1845年の7月4日(独立記念日)から2年2ヶ月間、その小屋に住む。この生活を通してソローは一つの確信に至る。体験記『ウォールデン』(*Walden, or Life in the Woods*, 1854)によれば、「シンプルかつ賢明」に生きること、これこそが、現実世界の中で「自己」を養う道であり、これは「苦痛」であるどころか、むしろ「娯楽」である、という確信である。

In short, I am convinced, both by faith and experience, that to maintain one's self on this earth is not a hardship but a pastime, if we will live simply and wisely. ²⁾

やがてソローは身近な「自然」に強い関心を寄せていく。同時に、その中を「歩くこと」にもこれに劣らない関心を寄せる。1851年4月、ソローは、コンコードのライシーアムで、「野生的なるもの」(“The Wild”)という演題で講演を行う。この講演は、この後何度も繰り返され、内容的にも充実したものとなる。最終的にエッセイ「ウォーキング」(“Walking”, 1862)として死後出版されるが、その冒頭で、ソローはこう述べる。

I wish to speak a word for nature, for absolute freedom and wildness, as contrasted with a freedom and culture merely civil, — to regard men as an inhabitant, or a part and parcel of Nature, rather than a member of society. (Emblidge, 3)

ソローは、「自然」について、すなわち「絶対的自由とワイルドネス」について語ることを願う。人間は文明化された「社会」の構成員であるよりも、むしろ「自然」の構成員である。それも、かけがえのない構成員であり、「自然」の中に

こそ、「文化」と一線を画した真の「自由」と、「ワイルドネス」がある、ソローはこう主張する。

「社会」と「自然」を二分化し、「自然」の中に、「自由」や「ワイルドネス」を見る。この視点は、マッケイのそれにきわめて近い。10歳前後のこどもとして抱いた「土地」への思い、その思いを継承する「レクリエーション・キャンプ」構想、「野蠻人」が機械文明に「反撃」する場としてのアパラチア山脈への視線、そこを「歩く」という発想。このような視線や発想の背後には、アメリカ北東部ニューイングランド地方の先達、森の生活者ソーローの影が重なる。

重なるどころか、部分的に一体化する。「自然」「ワイルドネス」「ウォーキング」—これらを日常的に実践していたソローは、湖畔の生活の合間を縫って、メイン州北部の森も訪ねる。『メインの森』(*The Main Woods*, 1864)はこの折の体験を記す。1846年の夏の末、コンコードからメイン州に向かったソローは、中心地バンゴアからさらに奥地に入り、ニューイングランド地方第二の標高を誇るマウント・カターディン(ソローは Ktaadn と表記)の登頂に挑む。著書冒頭部では、この次第が詳しく記される。ところが、ほかならないこの山が、20世紀のアパラチアン・トレイルの北端の山となる。

文学作品が特定の場所と関わるケースは少なくない。関わり具合には、もちろん個別の差があるが、場所に関わる題名を持つ作品をだけを想起しても、枚挙にいとまがない。文学作品における場所の占める比重の大きさを示す証である。

アパラチアン・トレイルということばを広義に解釈し、場所的にはトレイルの存在するアパラチア山脈全体、時間的にはトレイル完成以前も含むとする。関連する作品リストは長大なものとなる。時代的にトレイル完成時以前に限っても、たとえば次のような作品群がこの範疇に入る(Marshall, 6-7)。

William Bartram, *Travels* (1791)

Thomas Jefferson, *Notes on the State of Virginia* (1785)

Charles Brockden Brown, *Edgar Huntly* (1799)

Nathaniel Hawthorne, "The Ambitious Guest" (1835)

Herman Melville, "The Piazza" (1856)

Walt Whitman, "Song of the Open Road" (1860)

Henry David Thoreau, *The Main Woods* (1864)

James Mooney, *Myth of the Cherokee* (1900)

Robert Frost, *New Hampshire* (1923)

ソローの『メーンの森』は、メーン州奥地に向けたソローの三度の旅について記す。1846年9月のマウント・カタール登山、1853年9月のチェサンクック湖への旅、1857年7月のアレガッシュ川とその近辺への旅である。マウント・カタール登山が、アパラチアン・トレイルを代表する山とすれば、その山とその近辺の湖や川を、同行する友や道案内のインディアンと訪ね、その体験を詳細に記すこの作品は、広義のアパラチアン・トレイル紀行文とみて差し支えない。

『メーンの森』を含む上記作品群は、このような意味で、アパラチアン・トレイル関連アメリカ文学の範疇に入る。内容は多様である。バートラムは、チェロキー族の住んだアパラチア山脈南部について語り、ムーニーは、そのチェロキー族の神話について語る。ジェファソンは、ブルーリッジの山々を歩いてバージニアの豊かな自然について記し、ブラウンは、ペンシルヴァニアの岬々たる山を舞台にした物語を書く。詩人ホイットマンの詩集『草の葉』は、自由な広い世界に向かうエネルギーを讃える詩でうまり、アパラチアン・トレイルが通るニューヨーク州ハドソン川西岸ベア・マウンテン国立公園には、ホイットマンの銅像も建立される。一方、『緋文字』の作家ホーソーンは、ホワイト・マウンテンのふもとの出来事を短い物語に仕上げ、海の作家メルヴィルは、短編「ピアザ」で、マサチューセッツ州西部パークシャー地方を代表する山グレイロックを物語の舞台とする。いずれもアパラチアン・トレイルの通り道である。

詩人ホイットマンは、望む世界へ自分を導く「長い道」として、前方に延びる「褐色の道」を讃える。ホイットマンの思いを誘うこの「道」は、文学的な「場」としてのアパラチア山脈、そこを結ぶ一本の道を想起させる。さながら、ホイットマンは、20世紀の一本の道を、時代に先駆け、幻視していたかのようである。

A foot and light hearted I take to the open road,
Healthy, free, the world before me,
The long brown path before me leading wherever I choose.

(“Song of the Open Road,” *Emblidge*, 261)

5 アパラチアの森

アメリカ大陸開拓の歴史は、「未知の世界（テラ・インコグニタ）」開拓の歴史である。「テラ・インコグニタ」を支配していたのは、なによりもまず、「自然」であり、「荒野」であった。開拓の歴史とともに、文明化が進み、文化が形成され、

文学が生じる。その過程において「自然」や「荒野」が大きな役割を果たすのは必然である。アメリカ文学においてとりわけ「自然」や「荒野」のはたす役割が大きいのは、このことによる。

「自然」や「荒野」を対象とする書きものを「ネイチャー・ライティング (自然文学)」とよぶことがある。独立した文学ジャンルを指す用語として比較的最近用いられるようになったものである。ソローの文章は、精緻な科学的観察とゆたかな詩的感覚を融合させたものとして知られるが、ネイチャー・ライティングの核となるのは、基本的にこのような文章である。ただし、この呼称の意味の範囲は広い。自然に関わる物語や詩、科学的書き物、紀行文、探検記、ジャーナリストのエッセイ、これらもその範疇に入る。

ネイチャー・ライティングを眺める視点のひとつとして、「エコクリティシズム」が指摘される。1970年代にはじまるこの視点は、文学批評のひとつの在り方を示す。文学とは、社会の中の人間、すなわち制度や組織のなかの人間を描くものではなく、自然の中の人間、生命圏のなかの人間、自然環境あるいはエコシステムというネットワークに組み込まれた人間を描くもの、という視点である。人間と自然環境を一個のコミュニティとしてとらえるこの視点は、西欧文明の伝統的な視点、すなわち自然と人間、物質と精神を峻別する二元論的視点を、基本的に否定するものである (伊藤、1-16)。

エコクリティシズムの視点からネイチャー・ライティングを眺める場合、「場所の感覚 (sense of place)」が重要である。ネイチャー・ライティングにおける意味の中心が、自然や環境の中における人間、すなわち自然や環境と人間のネットワーク的関係性であるとすれば、自然や環境がどのような役割を果たしているか、すなわち「場所」がどのような役割を果たし、どのように機能し、人間がそれとどのように関わり合っているか、が重要な要素となるからである。この角度から眺めると、たとえばソローの『ウォールデン』は、ボストン近郊コンコードの「場所の感覚」の精緻な表象となる (Buell, 257)。アパラチアン・トレイルの場合はどうか。

アパラチアン・トレイルには、毎年約400万のハイカーが入るといふ。大部分はトレイルの一部を短期間楽しむ人である。しかし中には、トレイル全体の踏破を目指すものもいる。春から秋にかけ、5ヶ月から6ヶ月をかけて踏破に挑む人である。山なまかはこの人たちを「スルーハイカー」 (thru-hiker) と呼ぶ。

スルー・ハイカーのひとり、デヴィッド・ブリル (David Brill) の体験記『目路の限り』 (*As Far As the Eye Can See*, 1990, 2001増補版) は、アパラチアン・

トレイルについての「場所の感覚」を鮮明に語ってくれる。

1979年、23歳の若者ブリルは、ふとしたことからアパラチアン・トレイルの存在を知る。存在を知ったブリルは、ただちにスルー・ハイクに挑む。背景にはブリルを取り巻く社会的状況がある。第一次世界大戦後に「ロスト・ジェネレーション」(Lost Generation) が生まれたのと同様に、ベトナム戦争後、アメリカ合衆国には「ビート・ジェネレーション」(Beat Generation)が生まれる。葛藤と混乱の時代をくぐり抜けたこの世代には、信念と決断と実行が求められた。しかし、これに少し遅れる世代のブリルにとって、社会的状況は次のようなものであった。

But for me there was no war, no showdown. Instead, there was only college and a continuation of my comfortable life. Once in school, and without having made the slightest sacrifice, I savored all the privileges won by the young people who had preceded me and had waged the social revolution. (15)

山に向かうブリルには、明確な目的なしに生活を送ることへの懐疑の念と、ベトナム世代に対する後ろめたさが混在する。混在する意識を抱えて山に入るブリルは、なかまとともに、テントで眠り、シェルターに泊まり、時にはトレイル沿いのホテルやモーターに宿を取る。北を目指して三週間後、ノースカロライナ州ホットスプリングズに辿り着いたブリルと同行者ダンは、ピスガ国立公園の青い山々を遠望するその地で、ベトナム戦争時に学生時代を過ごし、今この地で宿と農場を営む二人の男性に出会う。近隣の文人・芸術家が集散するこの宿は、夜になるとさながら「みちのくルネッサンス村」(backwoods Renaissance community)の観を呈する。宿主二人は「60年代の灰の中からよみがえった二人の教師」のような存在であるが、この二人と親しく語り合い、農場にも案内されたブリルは、デュークとイエールという最高学府に学びつつも、最終的に今の生活を選択したこの二人の中に、「兄弟愛、共有、愛、平和、自然愛」という「時代精神の精華」をみてとる。とりわけ、イエール大学に学び、極東に旅し、牧師職を目指し、それをなげうっていまアパラチアン・トレイルの隣接地で農場を営むランダルに、ブリルは強く共鳴する。ランダルと語り合って「善と美で満ちみちた世界」の存在を実感したブリルは、夜更けの月あかりのもと、夜露が光る農場でせせらぎの音を耳にしながら、次のような感覚に襲われる。

Suddenly the boundaries separating me from the tranquil night world disappeared. The mountains engulfed me, and I began to feel as if I had just been born into a world filled with peace.

I experienced such an intense swell of emotion that I could hardly contain it, and for the first time in my life I knew that God and all His goodness lurked in every rock, in every tree, in every blade of grass, and in me. (146)

スルー・ハイカーにとって、ホット・スプリングズは、アパラチアン・トレイルの経過地のひとつに過ぎない。しかしブリルにとってこの地は、「神とその善意」の实在を教えてくれる場である。この場所をブリルは、「滋養、愛、受容、目覚め」を提供してくれる場として、「エデン」(139) とよぶ。

ソローの師エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) のエッセイ「自然」(“Nature,” 1841) には、よく知られた次の一節がある。ホット・スプリングズでのブリルの体験は、全身を通して流れる「普遍者」(Universal Being)の体験を語るものとして、エマソンの記した感覚ときわめて近い。

I become a transparent eyeball; I am nothing; I see all; the currents of Universal Being circulate through me; I am part or parcel of God.³⁾

作品『目路の限り』に一貫して流れるのは、ホット・スプリングズで体験したこの感覚である。山行きの仲間三人とアパラチアン・トレイル創始者マッケイに捧げられたこの本で、ブリルはさまざまなことを語る。自然のこと、天候のこと、動植物のこと、危険な体験、出会いや別れ、若者たちの生態、家族のこと、本のこと、そして、当時の仲間との20年後のマウント・カターディン再登山。これらについて、ブリルはきわめて雄弁に語る。アパラチア山脈を代表する特産品として、キルト (キルティング) があるが (Emblidge, xi)、ブリルの体験談は、さながら言葉で編まれたキルトである。

キルトのような体験談の中で一貫して変わらないのは、アパラチアン・トレイルに対する肯定的視線である。ホット・スプリングズというひとつの場を、ブリルは「エデン」と規定する。具体的には、上に見たように、「滋養、愛、受容、目覚め」としての場である。このような「場」の感覚は、アパラチアン・トレイル全体に及ぶ。トレイル完成以来、アパラチアン・トレイルが人々に提供し続けて

きたものとして、プリルは次の三点を指摘する (16)。

- (1) spiritual and physical growth
- (2) communion with the natural world
- (3) self discovery

アパラチアン・トレイルに対するプリルの「場所の感覚」は、上記三点に集約される。「精神的成長」、「自然界との触れ合い」、そして「自己発見」の感覚である。この感覚は、プリル固有のものであるわけではない。ソローやエマソン、そしてホイットマンやマッケイにも、確実に通底するものである。

6 おわりに

羊飼いや農民が主役となる詩として、田園を背景とするパストラル (pastoral) がある。紀元前3世紀のギリシャ詩人テオクリトゥースに始まるこの詩形は、ひとつの形式として、ローマの詩人に受け継がれ、ウェルギリウス (ヴァージル) の代表作『牧歌』に流れ込む。時代を下って、15世紀以降中世のヨーロッパでも、伝統的形式を持つ牧歌、あるいは田園詩として、詩の世界だけでなく、演劇や絵画、あるいは音楽の世界でもひろく継承されていく。

パストラルの形式的特徴のひとつは、牧夫 (羊飼い・農民) の存在である。平和な田園に生きる牧夫は、必ずしも単純な存在ではない。管理された場としての牧場や農場、あるいは田園は、未開の人間あるいは蛮人 (バルバロイ) の住む世界に比べれば、文明の側に大きく傾斜した場である。他方、都市や町の世界に比べれば、非文明の領域に大きく傾斜した場でもある (フロム、122)。このような場に生きる牧夫は、必然的に両義的存在となる。文明と自然の狭間で生きるひとりの人間である。

アパラチアン・トレイルの構想を、マッケイはローマ文明に対するバルバロイの反撃にたとえた。ダムのはげ口にもたとえた。ダム建造者として指摘したのはビューリタンである。北米大陸開拓の先頭を切ったひとたちである。この視点に立つマッケイには、牧夫の輪郭が重なる。文明化の道を進む国家アメリカと原初の自然をとどめるアパラチアの山々の間で、平和な一個の世界を希求する牧夫の輪郭である。

マッケイが牧夫とすれば、アパラチアン・トレイルは牧場であり、アパラチアン・トレイル関連文学は、基本的に牧歌となる。この牧歌の射程は広い。自然

歴史、環境。テーマとしては、これらすべてを包含する。ソロー、マッケイ、ブリルの書は、このような牧歌の表象にほかならない。アパラチア山脈を貫く一本の道は、この意味では、北米の自然や歴史や環境を包含する大いなる道でもある。

注

1) トレイル南端部は、1958年、道路建設等の影響により、Mount Oglethorpe からやや北上した場所にある Springer Mountain に移動する。1968年、Springer Mountain から Mount Katahdin までの Appalachian Trail が、National Trails System の一つとして、議会で公式に認定される。同時に認定されたトレイルは次の通り。 *National Scenic Trails*: Appalachian Trail, Continental Divide Trail, Ice Age Trail, Natchez Trace, North Country Trail, Pacific Crest Trail, Potomac Heritage Trail. *National Historic Trails*: Iditarod Trail, Juan Batista de Anza Trail, Lewis and Clark Trail, Mormon Pioneer Trail, Nez Perce Trail, Oregon Trail, Santa Fe Trail, Trail of Tears. Cf. Emblidge, p.207.

2) Thoreau, Henry David. *Walden: or Life in the Woods. The Writings of Henry David Thoreau.* Ed. J. Lyndon Shanley. Princeton: Princeton University Press, 1971: 70.

3) Emerson, Ralph Waldo. "Nature." *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson.* Ed. Joel Myerson. New York: AMS Press, 1979: 10.

参考文献

Brill, David. *As Far As the Eye Can See.* Harpers Ferry: Appalachian Trail Conference, 2001.

Buell, Lawrence. *The Environmental Imagination.* Cambridge: Harvard University Press, 1995.

Emblidge, David. *The Appalachian Trail Reader.* New York: Oxford University Press, 1996.

Highsmith, Carol M. & Ted Landphair. *Appalachian Trail: A Photographic Tour.* New York: Crescent Books, 1999.

Marshall, Ian. *Story Line: Exploring the Literature of the Appalachian*

- Marshall, Ian. *Story Line: Exploring the Literature of the Appalachian Trail*. Charlottesville: University of Virginia Press, 1998.
- Richardson Jr., Robert D. *Henry Thoreau: A Life of the Mind*. Berkeley: University of California Press, 1986.
- Turner, Frederick. "Cultivating the American Garden." *The Ecocriticism Reader*. Eds. Cheryll Glotfelty & Harold Fromm. Athens: The University of Georgia Press, 1996.
- S・スロヴィック・野口研一編著『アメリカ文学の<自然>を読む』（ミネルヴァ書房、1996）。
- ハロルド・フロム他著（伊藤詔子他訳・解説）『緑の文学批評 - エコクリティシズム』（松柏社、1998）。

（岩手大学教育学部英語教育講座）